

報告**山口県立博物館における****天文ボランティアの活動と今後の課題**

河野敦子（天文ボランティア）、田中美鈴（天文ボランティア）

1. はじめに

山口県立博物館の天文活動は、昭和初期から始まり 70 年以上もの歴史がある。一時中断した時期もあるが、古くから天文ファンがボランティアとして活動していたようだ。公募をしているわけではなく、自発的に発生したボランティアである。

ここでは、担当学芸員が一人だけという小さな博物館の自主ボランティアの紹介と、それゆえの問題点について考えていきたい。

2. 天文ボランティアの発足

現在の天文ボランティアは、1991 年に一人のボランティアが博物館の観望会に参加することから始まった。これまでに述べ 50 名近くが活躍したと聞く。ボランティアは厳格な登録制ではないため、現在のはっきりとした人数は不明だが、ボランティアのメーリングリストの登録者数は 27 名（2009 年 3 月現在）。実質活動人数は、15 名程度であろう。

ボランティアグループは、アマチュア団体「山口県天文協会」の会員が中心となり、近隣大学の学生、天文ファンの社会人で成り立っている。

3. 活動内容

主な活動の場は、博物館行事の「星を見る会」、「天文講演会」である。会場準備から受付、望遠鏡操作や参加者の案内、場合によっては駐車場整理まで行っている。

また、山口県内の天文ファンが中心となって「天文談話会」（図 1）も開かれている。これは博物館の一般向け行事とは異なり特に広

報はしておらず、山口県立博物館の天文ボランティア、各地の同好会のメンバーなど天文に興味のある者が集まって研究発表や報告を行う場となっている。2009 年 3 月に 109 回目を迎えた。



図 1 天文談話会

この時の話題は、冥王星の定義について。

近年行われるようになった活動では「ボランティア通信の発行」、大学生が中心となった「天文ゼミ」、「館外での観望会」があげられる。次に詳しく説明することにしよう。

3.1 近隣大学とのつながり

従来は、天文ファンの社会人のほか、山口大学生の先輩から後輩へとボランティアが引き継がれていたが、近年は山口大学天文サークルからの参加、県立大学からの参加もみられる。

学生のボランティアが増えたことにより、博物館の「星を見る会」に合わせた飾り付けや出し物の企画（図 2）をしたり、博物館とは関係なく自主活動として「ゲリラ観望会」

も行うことができた。

この「ゲリラ観望会」は、近くにある温泉街の公園を利用し、予告なく観望会を開く活動だ。望遠鏡などの機材は自分たちで持ち寄る。怪しまれながらもその場で呼びかけをし、集まる参加者は観光客や一般通行人である。

また、ボランティア学生からの声により博物館の一室を借りての「天文ゼミ」も週1回、行われるようになった。学芸員を助言者とし、学芸員が選んだ英文テキストを和訳発表する。学生にとっては大学の授業に加え、天文分野を勉強できる貴重な機会となっている。



図2 中秋の名月を見る会

企画から準備まで、全てボランティアスタッフで行った。

3.2 情報の共有

組織的に公募をしているボランティアと違い、前述の天文談話会のほかには研修会などが定期的に行われているわけではないため、ボランティア全員で集まる機会はまずない。そこで情報の共有や連絡網として、メーリングリストを活用することにした。「星を見る会」の事前準備などに大いに役立っている。

これにも関係するが、数年前より定期的に親睦会も行うようにしている。ボランティア同士の顔を知ることにより、他校の学生、社会人同士が一丸となり活動できるようになっ

た。天文教育普及研究会の集会への参加も恒例になりつつある。

一番大きな変化としては、ボランティア通信の発行がある。これはボランティアOBの要望で始まったものだが、「ボランティアのボランティアによるボランティアのための…」とでも言おうか。もうすぐ発行から3年目を迎える(図3)。内容は博物館行事への参加のレポートが中心となるが、嬉しいことにボランティアスタッフからの投稿も多い。天文ボランティア関係者やOBに無料配布し、近況報告としても役立っている。



図3 ボランティア通信

現在は5名の編集員で、2か月に1回のペースで発行している。

4. 自主ボランティアゆえの問題点

4.1 活動資金

前項であげたボランティア通信の発行にも係ることだが、ボランティア活動に博物館の予算は付いていない。「星を見る会」の飾り付けや出し物に使う文房具類、ボランティア通信を郵送する切手・封筒代なども全て有志が拠出している。

それぞれの活動を長く続け、さらに活動範囲を広げていくためには、資金の確保が欠かせない。ボランティアの中でも資金確保のための検討をはじめた。

1.NPO 法人化

結論から言うと、現在の状況ではまず無理であろう。事務の人材不足に加え、ボランティアの中に担当できる人を見つけることは難しい。複雑な事務処理が必要となり、とても片手間のできる内容ではない。

2.助成団体からの支援

一番可能性のある方法ではあるが、会計処理、報告会等への出席の必要性などを考えると、なかなか踏み切ることができずにいる。今後さらに検討を続けたい。

現在のボランティアは自由なだけに、組織的にまとまらないのが現状である。

自主ボランティアとは、自由に活動できる反面、活動資金の確保が困難であり、予算の面から活動に制限がかかることもあるのだ。

4.2 人材の流出

現在、山口県立博物館には 20cm の屈折望遠鏡が一台設置されている。この望遠鏡操作ができる人材が必要となるのだが、ここ数年、中心となっていた社会人や学生の転出・引退が著しい。ほとんどの学生の場合、卒業に伴い山口県を離れ、ボランティアを引退するので難しい問題だ。

また近年、近隣施設数箇所に望遠鏡が設置されたこともあり、学生ボランティアが分散して定着しなくなったこともあげられるだろう。公募をしていないため、人材確保は今後の課題でもある。

5. 今後の課題

5.1 人材確保と育成

現在、「星を見る会」に合わせて、学生ボランティアを対象とした望遠鏡操作の指導が社会人ボランティア、学芸員により行われている。

しかし、天文ボランティアは自主的な参加のため、日によって参加者にむらがあるうえ、時間がなかなか確保できないのが現状だ。

また、長年活動できる人材としては社会人のボランティアスタッフの確保が必要である。これからは何らかの方法で長年活動できる人材を探し、研修や指導の機会を設けることも考えなければならない。

5.2 学芸員の交代による解散

これを記すと担当学芸員に何か言われそうだが、学芸員の交代に伴うボランティア活動の中止は現実的に考えられることだ。自主ボランティアであるがゆえに、同じ活動を続けていける保障がないのだ。これまでの様々な活動も、学芸員との協働で実現してきた。これからも不安を抱えたまま活動を続けていくことになる。

6. おわりに

「なぜ博物館の組織的なボランティアグループに模様替えして、ボランティアも公募をしないのか？」と質問される方もあるだろう。事実、博物館職員からも公的なボランティア作りの意見が出ていると聞く。しかし、自分達のやりたいことが実現できる。他の施設、学校へも活動範囲を広げることができる。と、私たちは自由な活動を楽しんでいる。

このような博物館ボランティアへの参加の形もあるということを知ってもらえればと思う。